

---

# ショート・サーヴ

のりまき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ショート・サーガ

### 【NZコード】

N6467E

### 【作者名】 のりまき

### 【あらすじ】

雑貨店で働く少年を中心に繰り広げるファンタジーを短編で頑張つてみた。

ハシゴに足を掛け、一人の少年は地下倉庫へと降りていった。木壁に掛けられた松明が色濃く不気味な影を彼に見せるが、それには目もくれず、彼は倉庫の鍵を開けた。

廊下の明かりはほとんど入ってこないため、中は余計に暗かつた。それでも彼は平然と中央へと歩を進めていく。足に何かがぶつかるのではないか、という不安さえ見せなかつた。その足取りは淡々としていて、この倉庫内のどこに何があるのか、すべてを把握しているようだ。中央まで来た彼は、おもむろにポケットからマッチを取り出し、微かにしか見えないテーブルの上有るランプに明かりを灯した。

倉庫内は小奇麗であつた。中央を避けるように端へと追いやられている大小様々な木箱は、バランス良く積み重ねられ、それぞれに札がついている。少年はランプを手に取り、一つ一つ嘗め回すように札を見ていった。

田当ての木箱をすぐに見つけると、少年はランプを床に置いた。軽く腕を捲くる素振りをし、舌先を唇からチラリと出してみせる。それから腕を伸ばし、上層の小さな木箱から下ろしていった。力サカサに乾ききつた札が今にも崩れ落ちそうなために、その作業は慎重であった。ようやく田当ての中段にある木箱まで下ろし終えると、ランプを手に取り、再度札を確認した。ランプをその木箱の上に置き、下ろしておいた木箱を再び積みなおした。

一通りの作業を終えた少年は、ランプをテーブルの上に戻し、目当ての木箱を抱えたまま、そつと火を吹き消した。ぼんやりと松明

で照らされている廊下に来ると、しっかりと倉庫の鍵を閉め、二、三度戸締りを確認した。木箱を抱えたままハシゴを上ることはできないため、彼はハシゴの脇にあるベルトを引き出し、木箱に巻きつけると自分の腰と胸にも巻きつけ固定した。そのまま慣れた風にテントポよくハシゴを登つていいく。

ハシゴを登り終え木箱を下ろすと、少年はその中身を確かめた。それは袋に入った黄緑色の液体。田当ての『アスガルドの聖水』だ。袋を手に取り透かせて見た少年は、軽くうなずき木箱に戻そうとしたが、不意に横から伸びた手が彼から袋を奪い取った。

「やつとおめえも商品名を覚えてきたな、ハン」

ハン＝ルーキーが見上げた視線の先には、『マーカー雑貨店』の店主である、トム＝マーカーの立派なあごひげをさすりながら聖水を眺めている姿があった。

「そりやもう、当たり前でしょ」ハンは腰に手を当て、ニヤリと見て見せた。「てか、5年前からそればっか」

「んあ、そんなに経つたか？　んにしても、ウイルの野郎……液体はボトルに入ってくれって言つてるのに　ハン、おめえにボトル詰めは任せるぜ。おめえもそろそろ板についてきたからな」

袋を手元に返し背中を向けるトムに、少年は少しのため息を漏らした。

「板についてきたって……3年前からそればっか

アスガルド領イエルシュタットの一角にある町『レングンド』。トム＝マーカーが経営する『マーカー雑貨店』はその町に所在して

いた。毎日開かれる市、旅人に乗り物を提供する賃貸屋、他の店には売っていない独自の商品を提供する便利屋など様々な店舗が並び、住宅の数もそこそこ多いため、町の通りは賑やかであった。子供を学校へと通わせる若き母親、路上でパフォーマンスを披露し資金を得ようとする旅人、教会に通う老人。敷き詰められた石のタイルは、絶えず踏まれ続けていた。『マークー雑貨店』はその賑わいにも遅れをとらず、充実した営みを持つていた。

店の入り口には『イエルシュタットの音色貝殻』の暖簾が垂れ下がり、そこを潜ると店内の中央にある特売品やその日のおススメ商品を載せたワゴンが目に入り込んでくる。店内をぐるりと一周するように置かれた棚には、店の奥に行くほど値段が安くなるように商品が載せられていた。そして、一番奥にあるカウンターとその後ろにある特注品用の棚。カウンターの隅には地下倉庫とハンとトムの部屋へと通じる通路があった。開店は朝の十時くらい、外のランプに火を灯し、天井にあるいくつかのランプにも火を灯せば開業である。

トム＝マークーはその重い腰をカウンターの席に下ろし、店にある『イエルシュタット新聞』を読み始めた。店には『レングンド毎日新聞』と『イエルシュタット新聞』の二つを置いているが、発注数を減らしても『イエルシュタット新聞』の方が売れ残ってしまうのだ。少しの諦めもあるが、ちょうどいいぜ、と思いながら彼は毎日その新聞を手に取っていた。カウンターに座るのは、専ら彼だけである。品出しは全部ハン＝ルーキーに任せていた。開店の火を灯すのもハンである。ハンがランプに火を灯すと、流石にトムも新聞を仕舞わないわけにはいかなかつた。

この日も『アスガルドの聖水』をボトルに詰め、棚に置き終えた少年がランプに火を灯した。

「トムおじさん、ランプ点けました」

「おひ、ありがとよ」トムは大きく欠伸をすると、新聞をカウンターの端に置んだ。「さてと、今日も働くかな」

人の出入りが一段と増す昼前、町の通りも商人のロープで溢れてきていた。町の住民はこの時間帯になると、ほとんど店への出入りはなくなる。たいていの商人が、レングンドを訪れる前に関所で一晩休息を取つてくるのだ。そのため、町に訪れてくる時間帯が大体この時間帯となっている。それを知つてゐる住民は、この時間帯よりも前に田町での品を買いにやってくるのだった。

店を構えるものにとって、この時間帯ほど意氣込む時はない。『マーカー雑貨店』も例外ではなかつた。町を訪れる商人は、商品を買いにやってくるだけでなく、アスガルド領域外の貴重で田玉ともなりえる商品を仕入れるチャンスまでくれるのだ。

ハン＝ルーキーは商品の補充をしながら、ギラリと目を輝かせる店主を見て、思わず笑みをこぼしていた。先ほどの新聞を読んでいた姿とは打つて変わり、今ではすっかり立派な店主となつている。

「『イェルシュタットの海水』なんぞ、五キロ先行きや、タダだぜ、タダ！」

「じゃあ、『ハミルトンの鉱石』はどうだ？ これが意外にも買つ……あいや、採るのに苦労したんだ」

海水を取り下げる、次の商品をカウンターに出した商人は、覗くようすに姿勢を低くし、トム＝マーカーに愛想のいい笑顔を送つた。

「何が採るのに苦労した、だ。そんなもん隣町にわんさか溢れてやがるじやねえか。せめて、アスガルド領内でも、俺が採りに行けねえような代物を売りに出せや！」

ふてぶてしい態度に似合う太い腕を組んだトムから目を離し、『ハミルトンの鉱石』を袋に仕舞った商人は鼻息を漏らすと、店の床に穴を開けんばかりに踏み込んで出て行つてしまつた。そんな商人と店主のやり取りを見ていた一人の老人がカウンターへと歩み寄つてくる。

「カカカツ、お前さんも意地悪じやな、ジャック」

「じいさん、それは親父の名前だ。俺はトム＝マーカー。いい加減覚えてくれ」

「すまんのう。親父さんにそつくりじやて。特に、商人が売ろうとしている商品を選ぶ様がな。『イエルシュタットの海水』がタダで採れるなんてのは、お前さんくらいなもんだろう!』。五キロ先なんて、何が出てきやがるか、わかりやしないわい」

「もうちと若けりや、アスガルド領の隅まで行けるがな」「ちげえねえ」

ハンが商品の補充を続ける中、店主と老人の笑い声が響いた。老人は適当にカウンターの端にある『イエルシュタット新聞』を取ると、それをトムの前に差し出し、再びトムとの談話でカウンターを独占した。しかし、今は客が老人しかいないため、特に迷惑なわけでもなく、トムにとつても退屈しのぎにはちょうど良かつた。

二人の会話が盛り上がつていると、音色貝殻が店内にその涼しげな音を響かせた。黒のローブに巨大なリュックを背負つたその人物は、店内を眺め回すと、ゆっくりカウンターへと近づいてきた。口

ーブから見えるのは、切れ目の若い男の顔だった。

「さて、わしはお暇をせてもらつよ。百デニー、ここに置いとくから」老人は一枚の硬貨をカウンターに置き新聞を手にすると、腰を叩きながら青年のそばを通り抜けた。「お前さん、商人ではないな」歩みを止めた青年が顔を向けるが、老人はそのまま暖簾の方まで進んだ。「トムや、この暖簾はちと流すぎんかのう? 地面までついとるよ」

「用心のためだ。泥棒なんかが入つたら、たまんねえよ。まあ、そんなことを今更言つなや」

「そういうこいつたな、力力カツ。じゃあ、わしはこれで失礼するよ」「はいよ、今後とも御ひいきに」

老人の去つていいく姿を目で追つていいくのは、黒いローブの青年だけではなかつた。青年のそばを通る時に言つた言葉が、少年の補充する手を止めさせていた。老人の姿が見えなくなると、ハン＝ルーキーは、ふと我に返り再びカウンターを目指す青年に、視線をずらした。その一瞬、二人の視線が重なつた。少年はいらっしゃいませず咳き、青年はそのままカウンターへ徒步を進める。カウンターまで辿り着いた青年はリュックを下ろし、腕を組み口角を上げる店主に一瞥を投げた。それから重々しく口を開けてみる。

「お、おやつさん、売りたいものがあるんだ」「おめえ、『カモメ』だろ?」

顔をしかめるハン＝ルーキーの視線の先で、青年は思わずローブの上から耳に手を当てた。その行動を見たトムはニヤついて見せた。

「耳は出でねえよ、安心しな。俺と一部の常連客しか、お前が“カモメ”だと気付く奴はいねえよ。さつきのじいさんも常連客だから

な、去り際にあんなこと言いやがったんだ。それと、俺たちが“カモメ”に気付いたとしても、誰も口にはしねえ。中には“カモメ”を嫌う奴もいるけどよ、何の理由があるかわからねえが、口にはしねえんだ。だからって、ロープは脱ぐなよ。町を追い出されかねねえからな」

「な、なぜ“カモメ”だとわかった?」

トム＝マークーは青年の問いに答える前に、手を休めているハン＝ルーキーに視線をすらした。それに気付いたハンは、慌てて作業に戻る。

「ハン、ちょいと地下倉庫から『アスガルド象の皮』を取つてこいや

裏声になりながらも返事をした少年は、作業途中の木箱をカウンターの裏に置き、隅の通路から地下倉庫へと向かっていった。少年の姿が見えなくなるのを確認すると、店主は青年の方に向き直り、再び口角を上げる。

「なぜ、おめえが“カモメ”だとわかったか。その理由は足音だ。あのじいさんは耳がわりいからよ、そばまでいかねえとわからねえんだ。ま、商人と同じ安全な旅路を進めねえおめえたちが、足音を鳴らすなんてことは至難の業だうけどな」黙つている青年を見て、店主は腰を掛けなおした。「さてと、何を売つてくれるんだ?」

ハツと我に返つた青年は慌ててリュックを漁り始め、勢いよく商品をカウンターに出した。

「『ワイヤーバーンの卵』じゃねえか! 上級食品だぞ! おめえ、並みの力モ……商人じゃねえな? 名はなんて言うんだ?」

「『コール』アンクソンさ」青年は得意げになり、一つの卵を弄んだ。

「ば、バカ野郎。大事な商品が、危ねえじやねえか！ ほう。しかし、その若さで『ワイバーンの卵』を手に入れるとはな。親が不在だつたのか？」

「まさか。一体ほど飛んできたよ」

うつすらと笑みを浮かべた『コール』は、リュックから次の商品を取り出した。それを見た瞬間、店主の田がギラギラに輝きだした。

「『ワイバーンの卵』！ 最上級名品が田の前にい！ なあ、いくらで売つてくれるんだ？」

「卵が五つ、牙が十本で、二万デニーだな」

「いや、そこは一万デニーだろうが？」

「よーし、じゃあ、一万八千デニー」

「一万四千で、どうだ？」

「それはできないね。一万六千で」

「もう一声！」

「OK、一万五千だ」

「それ以上は無理かい、若き大商人様よ？」

「おやつさんには悪いけど、こっちも旅の資金が必要なんでな。今回のことろは勘弁してくれよ」

「しゃあねえか。これだけの商品手に入れられるだけでもありがてえや ほらよ、代金だ。久々のコシミだからな、五百デニーほど色をつけてやつたぜ」

「おお！ サンキュー、おやつさん。じゃあ、俺の方も卵をもう一つ付けとくぜ」

「おうよ。しつかりロープは着とくんだぞ」

買った商品を大事そうに腕で囲みながら店主は、『コール』を満面

の笑みで見送った。満足そうに店を出て行く彼から、足音は聞こえなかつた。青年の姿が見えなくなると、頭を搔きながらハン＝ルーキーが地下倉庫から戻ってきた。

「トムおじさん、『アスガルド象の皮』は無かつたよ」

「そうか？ ジャあ、今晚にでもウイルに発注しといってくれ

わかつた、と返事をして、カウンターの裏に置いておいた木箱を持つた少年は、ふと誰もいない店内を見渡した。

「あれ？ おじさん、“カモメ”の兄さんはもう帰っちゃつたの？」

「ああ。中々良い代物を置いてつてくれたぜ」

「初めて見たのに……。もつとゆっくりしてくれれば良かつたのになあ」

「奴も疲れてるのさ。早く宿に就きたいんだろうよ。それより、ハ

ン、“カモメ”が来たことは口外するなよ」

「毎晩言われてるし、しつかり口は閉ざしておくよ

力なく作業に戻るハンはチラリとトムの方を見た。トムは店の入り口を見て、笑みをこぼしていた。

客足の最高潮を迎える昼下がり。行き交う人々の賑わいも一段と増していた。その中、一際目立つ格好でスラリと背丈を伸ばすヴィアム＝ヴィンスは颯爽と歩いていた。先をクルリと巻かせたロビゲを人差し指と親指でつまみ、通りを歩く人々を眺め回している。彼はこの町最大の工場を持つヴィンス家の末裔であった。彼の工場は数多くの店から注文を受けており、絶えず活動されていた。『マーカー雑貨店』も彼の工場から度々発注していた。

愉快な靴音を鳴らしながら歩くウイリアムは、若い女性を見ては軽く手を振つて見せていた。愛想よく会釈をしてくれる女性に夢中になつていると、突然前から来た商人に肩が当たつてしまつた。

「ちょっと君、気をつけたまえ！」

相変わらずヒゲをつまみながらも、偉ぶる彼に黒いローブの商人は軽く頭を下げ、その場を去つていつた。その後姿にウイリアムは顔をしかめて見せる。ふと思い立つたように口を開けると、女性に手を振つてから歩くテンポを速め、通りの中心を抜けていつた。

人が次々と出入りを繰り返す雑貨店にウイリアムは慌てて入り込むと音色貝殻がけたたましい音で鳴り響いた。店内は客で賑わいを見せ、一人の少年が補充に夢中になつていた。しかし、ウイリアムは店の中に興味はなく、真っ先にカウンターにいるガタイの良い店主に歩み寄つた。

「オホホホッ、ご機嫌麗しゅう」

「なんだ、ウイルじやねえか。どうしたんだ、そんなにはしゃいで？」

「はしゃぐ？ とんでもない。内心、ドキドキでござりますよ」

仰ぐように手をパタつかせると、ウイルは周りを見てから店主に顔を近づけた。「ちょっと面白いモノを見ましてねえ……詳しくは地下倉庫で」

「何だつてんだ？ まあいいや。ハン、カウンター頼むぜ」

「あ、わかりました」

少年は補充を中断し、木箱と共にカウンターの方へとやつて來た。地下倉庫へと向かう二人を見ていると、ヒゲをつまみながらウイリアムが不敵な笑みでハンと目を合わせた。一瞬、金縛りにあつたか

のよつに緊張がほとばしってから、少年はウイリアムに軽く会釈をした。

地下倉庫のランプは揺らめく」となく、辺りを照らし続けている。そのランプを挟むように長身の男と大男は向き合っていた。

「おめえのはしゃぎよつから察しは付いていたけど。町で見かけたんだな、『カモメ』を」

「見かけたなんでものじやありませんよ。ワタクシの肩にぶつかつたんですね」言いながら、ウイリアムは肩の上を手で払った。

「実はよ、俺のトコにも来たんだぜ。黒いローブを来た『カモメ』さん」

「なんとまあ！ ワタクシの肩にぶつかつた奴と同じですねえ、オホホホッ。早く出て行つてくれればよろしいのに」

ヒゲをつまみながら、さらに悪口を言い続ける長身の男に、トム＝マーカーは言葉を投げかけた。

「なあ、ウイル。おめえに聞きてえんだが……どうしてそこまで“カモメ”を嫌うんだ？」

「おかしなことを聞きますねえ。第一、奴らは化け物ですよ。住民たちが嫌う理由だってそこにあるのでしよう。しかし、ワタクシは彼らとは違つのです……その理由は、恥ずかしくて言えませんがねえ」

「まあ、言いたくないのなら言わなくていいぜ。それからな、もつ一つあるんだ」

「はい、何でしょつか？」

「そこまで嫌い、『カモメ』の見分け方まで知つておきながら、『カモメ』を見たときに、おめえはなんで口外しねえんだ？」

「オホホホッ、言えるわけないじやない。ワタクシが口外したと知

れたら、何されるかわかつたもんじゃないですよ」

「ああ……まあ、いらねえ心配のような気もするが、何にしても口外しないでくれればそれでいい 話ってのは、それだけか？ そろそろ戻らなければならねえ。今の時間帯は忙しいんでな」

「オホホホッ。つい知らせたくなつてしまいましてね。特に用事はなかつたのです」「

適当な愛想笑いを作ると、ウイリアムは愉快な靴音を立て倉庫を出て行く。ランプを消したトムも頭を搔きながら、その後ろをついていった。

一人がカウンターまで戻つてくると、少年がちょうど密にお釣りを渡すところだった。一人に気付いた少年は、カウンターを離れ、一人のそばまで歩み寄る。

「しつかりやつてたか、ハン？」

「もちろんですよ」

「オホホホッ。偉いですねえ、ハンくん」

「あ、そうだ」 ウィリアムに笑つて見せた少年は、ふと思い出したように手の平に拳骨を落とした。「ウイリアムさん、『アスガルド象の皮』を頼みたいんですけど、今、大丈夫ですか？」

「メモ用紙かなんかに書いてくれると、ありがたいですねえ」

それを聞くと、ハンは部屋へとメモ用紙を取りに行つた。その後姿を見ていた店主が今度は手の平に拳骨を落とす。

「おう、そうだそうだ。ウイル、ちとおめえに言いたいことがあるんだ」 首を傾げているウィリアムの視線を誘導するように、トムは棚に置いてある『アスガルドの聖水』を指差した。「液体商品を送る時はよ、ボトルに入れておいてくれねえか。袋だと、何かの拍子

に破けて、こぼれちまうかもしだれねえだろ」

「おや、最近はボトルも一緒に入れてありますかねえ」

「そうじやねえよ。袋から詰め替えるのも面倒だし、破けるかもしねえだろ。だから、袋じゃなく、ボトルで送つてくれつて言ってんだ」

「なるほど。承知いたしました。次からはボトルに詰めておきますゆえ、これからもよろしくお願ひしますよ」

お辞儀をするウイリアムに向かつてトムは頷くと、商品を持った客がカウンターにやつてきて彼を見つめた。それに気付いたトムが慌ててカウンターに着くと、ちょうどハンが戻ってきて、カウンターの脇に立つているウイリアムに紙を渡した。

「『アスガルド象の皮』を五〇枚頼みます。一応、捺印しておきましたので」

「オホホホッ。本当に、偉いですねえ　　『アスガルド象の皮』五〇枚と……承知いたしました」

再度お辞儀するウイリアムに軽く会釈をすると、少年は木箱を取り出し補充の作業に戻つた。その姿を見つめたあと、長身の男は店内を見渡し微笑んだ。棚の方を見つめる客、商品を手に取り眺め回す客、カゴ一杯に商品を詰め込んでいる客。彼は、まるで自分が経営する店のような感覚に陥つっていた。不意に思い立つたように歩を進めていくと、中央のワゴンから一つの商品を手にした。

「トムさん、この『ワイバーンの牙』は“例の商人”が売つてきたものでしょつか?」

「はい、三六デニーのお釣りです　　ああ、そうだ。傷つけるなよ　　あ、いらっしゃいませえ」

店主は接待を交わしつつもウイリアムの質問にぶっきら棒に答えた。ウイリアムは『ワイバーンの卵』を眺め回しワゴンに張られている値札を見ると、懐から財布を取り出しカウンターへと向かった。

ようやく前の客が会計を済ませると、ウイリアムは商品と共に代金もカウンターに出した。店主は代金を数えると、長身の男を見上げた。

「たつた一つか？」  
「ワタクシ、今は持ち合わせておりませんのでねえ、オホホホッ」  
「まあ、買つてくれるだけありがてえな　はいよ、商品と五百テー二ーのお釣りだ」

微笑み続けるウイリアムに、トムは箱詰めした商品とお釣りを渡した。ウイリアムはクルリと振り返ると、愉快な靴音と共に出入り口の音色貝殻を鳴らし、外へと出て行った。その後姿を見送りうつむせず、トムはカウンターへとやってくる客を迎えていた。

夜に向けて、住民は夕食の支度を始め、路上パフォーマンスをしていた旅人は片づけを始め、各店を寄り商品を売りに出していた商人は宿へと就き始める。涼しげな風が吹く夕方のこの時間帯、少年はカゴを持って行き付けの食品店へと向かっていた。腕を隠すようにロープを羽織り、石のタイルの上を進んでいく。夕食の買出しは彼の役目であった。売れ残りの商品があれば、それを使って夕食にするが、たいていがそれだけでは物足りなかつた。

今晩は『ワイバーンの卵』を使うことを決めているハンは、それに何を付け加えようか考えながら歩いていると、不意に何かにぶつかり、その反動で尻餅をついてしまった。周りの視線を気にしながら

らも立ち上がり手でお尻を払い、何にぶつかったのか確認した。彼がぶつかったのは、通りの中央にある大木であった。まるでその木が悪いかのように睨みつけ、文句を言いながら立ち去ろうとした少年だったが、突然、大木の陰から現れた黒いロープの男に行く手を阻まれた。男に向かつて一瞬顔をしかめるが、見覚えのあるロープに少年はハッとした。

「あっ！ 昼前に店に来た……えっと、“商人”的……」

「二コール＝アンクソンだ」

「ああ、アンクソンさん。何か、僕に用でも？ あ、商品の売りつけはやめてくださいよ。勝手に買うと、トムおじさんに怒られちゃうから」

「別に売りつけようなんて思っちゃいねえよ あのおやつさん、トムって言つのか……」少し考え込む二コールに少年は首を傾げて見せた。「あ、いや、ちょっと気になつてな お前さん、名はなんて言うんだ？ あのおやつさんの息子か？」

「僕はハン＝ルーキー。トムおじさんって呼んでるんだから、息子じゃないでしょ」

「ああ、それもそうだな、ハハハ。そういうや、お前さん」

「ハン、でいいよ」

「ああ。じゃあ、ハンはいつからあの店で働いてんだ？」

「五年前からだよ。十二歳の時だった。この町に化け物がやつてきてさ、そいつに僕の両親が殺されちゃったんだ。僕はそのとき、化け物に攻撃されて氣を失つちゃつてさ ほら」その時の証拠を示すように、ハンは前髪をかき上げ額にある打撲のような傷を見せた。「気付いたらトムおじさんの家について、両親の死を聞かされて、そこで暮らすことにしてしたんだ 店を手伝いながらね」

あまり辛そうな素振りを見せらず、少年は淡々と話した。それを聞いていた黒いロープの男は、腕を組み俯いていた。覗き込む少年の

目には、真剣な表情をしたニコールの顔が映った。

「どうしたんですか？」

「ああ。いろいろ大変だな、と思つてよ。実を言つとよ、お前さんに似た奴を探しながら旅してんだ。だから、ひょっとしたら、と思つたんだけど、どうやらやつぱり違うみてえだ。第一、ハンの耳は“カモメ”じゃねえしな」

「僕の耳？ ねえ、ニコールさん。トムおじさんから毎晩“カモメ”は凄い奴らだつて聞いてるけど……“カモメ”って何なのか知らないんだ」

「やつぱり、お前さんは違うみてえだな。“カモメ”つてのは、少し……いや、だいぶ変わった旅人さ。“ごく少数しか存在しねえし、定住することがない。一番の特徴は、耳だ。人間の姿をしておきながら、人間の耳ではない。一部では鳥人“ハーピー”の亞種だと思われているように、“カモメ”的耳は“翼”になつてているのさ。そして、さらに重要なのが、体のどこか“ある一部”が月明かりにさらされると、獸になつてしまふんだ」俯き加減の顔を上げ、真剣な面持ちのハンを見ると、ウイリアムは微笑んでローブの袖から手の平ほどの球を取り出した。「だがな、この球を持つていれば獸にならずに済む。若すぎると理性を失つてしまふけどな」

手の平で弄ばれている球を、ハンはまじまじと見つめていた。見覚えのある物体。どこでみたのだろうか、と頭の中を搔き巡らせていた。彼の食いつくような視線に気付くと、ニコールはその球をサッと袖に戻した。

「買い物途中だろ？ 時間とらせて済まなかつたな」

「あ、いや。話がてきてよかつたです。初めて会つた……“商人”でしたので」

「おいおい、“商人”は初めてじゃないだろ、ハハハッ。じゃあ、

## トム＝マークーによるじくな

軽く手を振り去つていく一コールをハンは見送つた。“カモメ”という存在を改めて知り、思わず耳に手を触れてみたが、何の変哲もない“ただの耳”だった。しばらく、その場で立ち尽くしていた少年だつたが、日の傾きに気付き、急いで食品店へと向かつていた。

『CLOSED』と書かれた看板が入り口にかけられている店の奥で、淡い光が中を照らしている。狭い部屋の中でハン＝ルーキーとトム＝マークーは夕食のオムライスを頬張つていた。トムのオムライスは、ハンのものとは比べ物にならないほどの大ささで、さらには、その食いつぶりも比べ物にならない。二人は食事の前に話していた話の続きをしていた。

「んで、一コールに“カモメ”的特徴を教えてもらつたんだな？」  
「そう。“ハーピー”の亞種だと思われるよう、耳が“翼”になつてゐるんだつて。それで、月明かりにさらされると獸になつちゃうんだ」そこまで口にすると、少年は思い出したように続けた。  
「そうそう。それから、“カモメ”は獸にならないよう、球を持つてゐんだつてさ。見せてもらつたんだけど、なんか、どこかで見たことがあるような気がするんだ」

「よう、ハン。今日会つてさ、どうよ？“カモメ”に興味がわいたか？」

ハンが嬉しそうに頷くや否や、トムは席を立ち、ランプを手にして店の方へと歩いていった。暗くなり冷やりとした空気が張り詰める店の中、トムはカウンターの後ろにある特注品の棚から一つの引き出しを開け、中身をそつと持ち出した。部屋に戻り、不思議そう

な目をしている少年の目の前に持ち出したものを音も無く置く。それは、黒いローブの男が見せた球にそっくりの球と一人の幼い“カモメ”を写した写真だつた。トムは自分の席に座り、真剣な表情をした。

「ちよいと話を聞いてくれや。その球は親父のものだ。俺の親父は“カモメ”だつた」ふとトムの顔を見上げるハンに、少しの間を空けてからトムは続けた。「その証拠は、墓と一緒に埋めちまつた。だが、その球だけは取つておいたんだ。形見だからよ。“カモメ”は定住しないって言つ説は、ある意味では当たつているがな、親父はこの店を構え、この町に定住し始めた。もちろん、“カモメ”だとばれないようにローブを毎日被つていたさ。だが、ある時、親父の耳に異変が起こつた。耳が“翼”でなく、“人の耳”になつていたんだ。月明かりに触れても獸にならねえ。球も必要なくなつた。唯一の不幸は、体が極端に重くなつたことだけだ。だがな、親父は、そんなこと苦でもなんでもねえ、と言つていた。“カモメ”の時に町を追い出されたことの方が苦しかつたんだとよ」

少しの笑いを含んだトムに微笑みかけると、ハンは球の隣に添えられた一枚の写真に見入つた。そこに写る少年は、こちらに向き幸せそうに笑つている。不意に、ハンの視界に指が飛び込み、その写真の上に置かれた。

「人となつた親父は、間もなくしてお袋と結婚した。そして、俺が生まれた。“ハーピーの亞種”なんてのは間違いだ。“カモメ”は人から生まれてくるのさ」

「じゃあ、この子は……トムおじさん？」

「そうだ。なかなか可愛いだろ？ 親父もお袋も驚いたらしいが、二人は大事に俺を育ててくれた。今来てくれる店の常連客も二人を助けてくれたさ。俺の耳が“翼”じゃなくなつたのは、十歳の時だ

つた。これで、俺も月明かりを怖がらなくて済むと思つたんだが、“ひざ”に光が射すと、たちまちそこから獣へと化けていつてしまつた。あの時の光景は今でも覚えている。気付いたら俺は部屋にて、この球を親父から譲り受けた。その日から俺は獣にはならないで済んだが、月明かりに当たると、耳が“翼”になり意思を持たないまま夜をさまようようになった。二十歳をすぎた頃、とうとうその苦しみに変化が訪れたんだ。俺は、一度と耳が“翼”になることがなくなつた。しばらくして、親父が死に、お袋も後を追うようにして死んじました。親父は死ぬ前に、俺に目標を与えてくれたんだ。この球の秘密を知ること。この球は誰に作られたのか。なぜ、“カモメ”が持つてゐるのか。俺はそれを知るために旅に出るつもりだつたが、独り身の俺にはとうとう叶えられなかつた。親父の店も継がなけりやならねえし、何より、もう四十になる

俯き、テーブルの上で球を転がすトムを見て、ハンは口を開いたが、それよりも早く、トムが声を発した。

「そこでだ。この球をお前に渡し、俺と親父の目標をお前に託す。ちよづどいといところへ“カモメ”が来たんだ。一緒に連れてつもらえ」

「ト、トムおじさん！ 僕はここだ」

「まだ十七歳だ。体が重くなる前に定住はやめな

「おじさん、何言つてるんだよ？」

「おめえは、“カモメ”なんだよ！ 親父の目標を達成できるのは、人になつちまつた俺じゃねえ！」

店の方まで響き渡る怒鳴り声。ハンを見つめながら、立ち上がつたトムは息を切らしていた。張り詰める空氣の中、ハンは無意識の内に“カモメ”と呟いている。少し呼吸を整えると、トムはハンの前髪をかきあげ、打撲のような傷をあらわにさせた。

「おめえの両親が死んだがどうかなんて、俺にはわりやしねえ。だが、この傷は俺がつけた。五年前、この町を化け物が襲ってきたんだ。俺はすぐに気付いたさ……“カモメ”だと。そして、店から球を持ち出し、そいつに触れさせ、元の姿に戻った瞬間に棍棒で叩きつけたんだ。それがこの傷だ。おめえは両親を亡くしたショックで記憶喪失になつたんじゃねえ。俺の一撃で、一部の記憶が飛んじまつたんだ」

「僕が、この町を、襲つた……トムおじさん、僕は　ハン＝ルーキーだよね？」

「その答えを知りたきや、明日二コールに聞くんだな。ちと話しうぎて、疲れちまつたぜ。明日の夜、俺が出かけているうちに出発しな。余計な涙は見せたくねえからよ」

いつの間にか食べ終えていた食器を片し、トム＝マーカーは奥へと行つてしまつた。その後姿を見ることなく、ハンは何も考えずに俯いていた。雲が遮るうとする月明かりの下で、一軒の明かりはうつすらと闇に包まれていった。

翌日になり、二人は朝の挨拶を交わすが、まるで何も無かつたかのように平然としていた。いつものように、地下倉庫を行つた少年が木箱を持ってきて開店への準備を進め、店主は『イェルシュタット新聞』をカウンターで読む。十時を回る頃になり、店の外と中のランプを灯し開業となると、店主は新聞をカウンターの外にやる。始めは住民が買い物に来て、昼前になると商人が売り物を持つてやってくるが、ほとんど売れずに追いやられてしまった。まるで、昨日の繰り返しのように、商人と店主のやり取りに笑いながらカウンターに来た老人が世間話を終えると、カウンターの端にある新聞を百デニーで買つていった。昼下がりの客足が増す頃、店は忙しくな

り、少年は補充に夢中になつた。

そして夕方、珍しくトムの方が夕食の買い物をしだした。店番を頼まれたハンは、客がいなくなると俯いた。チラリと見えるカウンターの下の荷物に、思わずため息が出る。トム＝マーカーの願いを聞き入れたい気持ちもあるが、彼と別れる寂しさと不安が少年を悩ませていた。考え込むあまり再度ため息が漏れてしまった、その時、音色貝殻の音が鳴り響くと共にウイリアム＝ヴァインスが店へ入り込んだ。

「あ、いらっしゃいませ。えっと、トムおじさんは、今買い物に出てるんですよ」

「用があるのはトムさんではないです。君ですよ ルーン＝キー

ハ

ウイリアムは赤く輝くガギ爪を取り出し、少年に歩み寄つていく。その憎悪に満ちた冷酷な目が自然と少年をカウンターから引きずり出していた。あまりの恐怖に立ち竦べる少年に、ウイリアムはそのまま手を振りかざした。

買い物を終えたトムは、常連客である老人と一緒に宿の前に立つていた。町の中ではもともとみすぼらしこと思えるほどのボロ宿である。

「じこさん、あいつは一万デニー以上稼いだんだぜ。本当にこのボロ宿に泊まつてるとのかよ？」

「こんな宿じやなきや、わしの記憶に残らんよ。いやいや、しかし

奴をつけてて正解じやつたのう」

「まあ、一応、礼は言つとくよ」

トムはそう言い残し、頭を搔きながら宿の中へと入つていった。

宿の中はさうぱりしているとこ「うよつも、物が少なく殺風景だつた。軋む床は今にも穴が開きそうで、トムは慎重にカウンターまで進んだ。そこには、一人の老婆が半開きの目で座つており、トムに気付くと、かくすとお辞儀をしてきた。

「なあ、ばあさん。黒いローブに大きなリュックを背負つた奴が泊まりに来なかつたか?」

「ああ、一階の奥ですじや」

「ありがとよ、なかなか頭をえてるじやねえか」

□角を上げてみせるトムがその場を離れると、老婆はまた、かくりとお辞儀をした。

奥の部屋の戸を二、三度ノックすると、音も無く戸が開き、中から黒いローブを被つた二コール＝アンクソンが顔を出した。軽く手を上げ微笑むトムを見ると、二コールは廊下を見渡してから彼を中に入れた。部屋の中もさつきまでの光景とさほど変わらず、相変わらず床が軋んでいた。しかし、二コールの足元からは床の軋む音は聞こえない。

「いやあ、おやつさんがあつたよつて、靴音を鳴らさうと思つてこにしたんだけどね」

苦笑を浮かべながら、彼はローブを脱ぎ、顔をあらわにした。折り畳まれた“翼”は先が青く輝かしかつた。「それで、この俺に何の用だい?」

「実は、頼みがあるんだ。ハンと一緒に連れてつて欲しい。親父の目標を達成させたいんだ」

あまりにも真剣なトムの表情に、一瞬ニコールは緊張したが、少し視線をずらし、ふと口角を上げた。

「やつぱりな 親父さん、“カモメ”だつただろ? „ジャック＝マークー”。旅人たちの間では有名な“カモメ”さ。そして、彼の目標も有名だ “カモメ”が持つ球の謎を解明すること。確かにこれは、“カモメ”にしかできない。ハンが言っていた。五年も店にて、“カモメ”に会つたのは俺が初めてだそうだ

「それで、俺の頼みは受け入れてくれるんだろうな?」

「もちろん! ハンは俺が探していた“カモメ”だ

「おめえ、ハンが“カモメ”だと気付いていたのか?」

「いいや。おやつさんの頼みで確信に変わったんだ」

満面の笑みを見せるニコールに、トムはそっと胸を撫で下ろした。その途端、不意にけたたましく戸が鳴り響き、外側から老人が大声を出していた。

「トムや! ハンがウィルに襲われてある!」

木々に囲まれた暗闇の中、ハン＝ルーキーは、木々をなぎ倒しながら迫り来る長身の男から逃げていた。後ろから聞こえる轟音は次第に大きくなり、目の前の視界は真っ暗だつた。靴底に張り付く泥がさらにハンの動きを鈍くさせる。突然、目の前の暗闇が晴れたと思いきや、その視線の先には狂犬のようにななるウイリアムが立っていた。充血したその目つきに怯え、木々の陰に身を置いたハンだつたが、あまりの恐怖に動くことに敵わなかつた。

「逃がすわけにはいきませんよ」よだれを垂らしながらも、長身の

男は言葉を発した。「老人から君と“カモメ”が何を話していたのかを聞き、ワタクシ、確信が持てたのです。五年前、君が町を襲い、ワタクシの愛する妹を殺したのですよ。許せませんねえ。許しませんよ。許しませんとも！『ワイバーンの牙』は聖水と合成すると強大な力を得ることができる『極水』ができますの。ワタクシの願いはこうです。テメエを殺し、俺もこの『極水』で身を滅ぼす！」

低い姿勢から飛び出すウイリアムは力ギ爪をつけた閃光となり、一瞬にしてハンとの間合いを詰めた。奇声を発しながら突き出した力ギ爪が黒ずんだ赤を色づけていく。高鳴る鼓動が耳の奥に響いている少年の目の前で、見慣れた店主の笑顔があつた。

ウイリアムまでもが動きを止めているその瞬間に、横から来た二コールがウイリアムを突き放した。

「おやつさん、大丈夫か？」  
「こんなもん、たいしたこたあ、ねえぜ」

「二コールさん、僕の本当の名前は？」  
「ル、ルーン＝キーハだ。七年前、行方を暗ました……俺の相棒」  
「そつ。やつと思いついたんだ。懐かしい、この、冷めた興奮」

鼓動とは裏腹に、冷静な脳内。

白く輝く“翼”を広げ、少年は狂気に満ちた男の下に寄った。ウイリアムは白目となり牙を生やし、理性を失っていた。ただ目の前

の少年を力ギ爪で引っかき、血のにおいを漂わせる、倒れているトムのところへと駆け寄る。トムを介抱していた二コールはウイリアムの目の前に立ちはだかった。その刹那、一陣の風を起こし、ルーンはウイリアムの後頭部を掴んでいた。

「理性を失った僕がウイリアムさんの妹を殺めたことは謝る。だけど、理性のある今、僕の目の前で、おじさんが身を滅ぼすことは許さない」

のどの奥に詰まつた叫び声がその場に響き、黒い蒸氣と共にウイリアムは正気に戻つていった。田から涙が溢れ出ししづくまる彼にて、誰も声をかけてあげることはできなかつた。

夜が明け、小鳥のさえずりが聞こえる中、ロープを来たルーンは涙ぐんだトム＝マークーと別れの挨拶を交わしていた。トムは昨晩、店に帰つてから傷薬を塗り、ルーンの協力もあつて、一晩で回復まで至つていた。抱きつき別れを惜しむ一人に、大きなリュックを背負つた二コールは愛想を尽かしていた。

「おい、さつさとしねえと、昨日のおっさんが言いふらしちまうだ

ろうが」

「うん。じゃあ、トムおじさん、行つてきます」

「おうよ。くそつー。似合わねえ涙なんか流しちまつたぜ」

青く澄み切つた空は旅日和。新たに旅立つ二羽の“カモメ”が空高く飛び舞うのは、まだまだ先の話である。

(後書き)

読んでくださってありがとうございます。  
感想などくれましたら、うれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6467e/>

---

ショート・サーガ

2010年10月13日21時21分発行